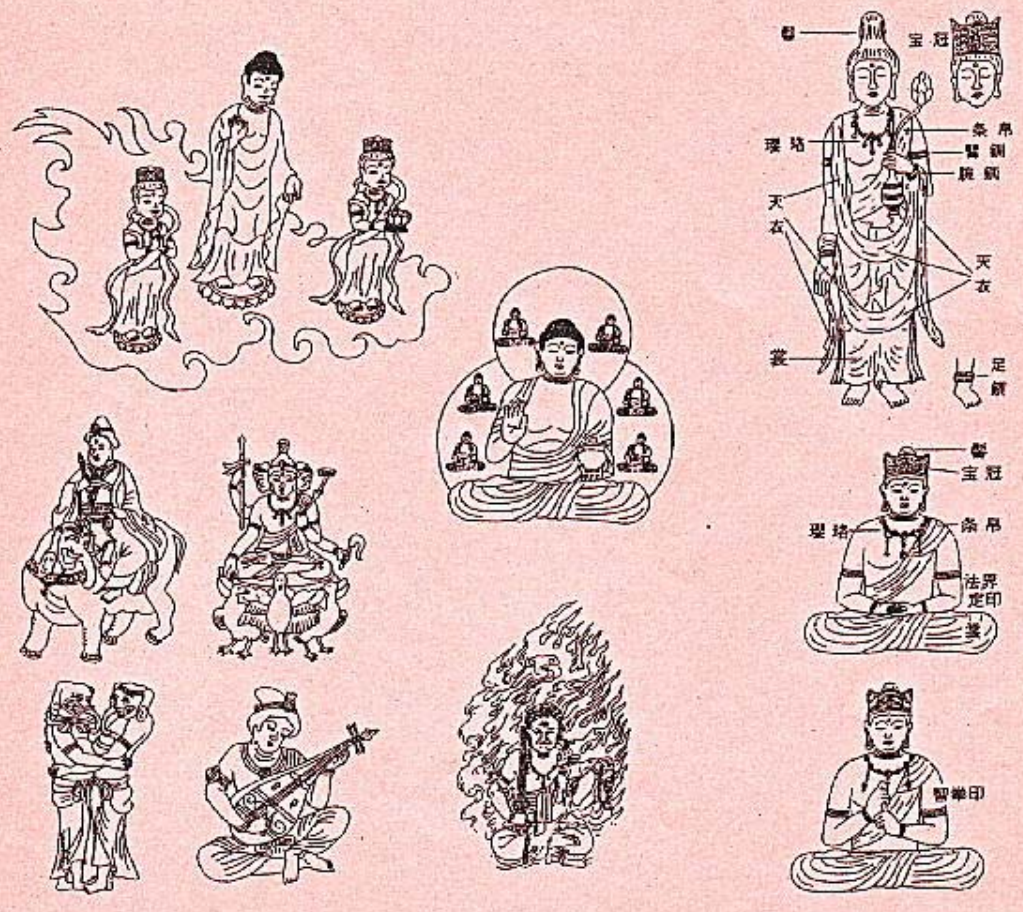
地域の皆様　平成19年度　東伊興小

第４回 地域公開講座

テーマ　「知っておきたい仏像の見方」

申しこみ方法　お電話・ファックスで　東伊興小学校　副校長　加藤浩子まで
①　お名前 ②ご住所　③お電話番号　をお知らせ下さい。
☎ ３８９７－５３４１　ＦＡＸ　３８９７－５３４２

月　日　平成２０年1月１２日（土）　午後２：００～３：３０
会　場　東伊興小学校の理科室
参加費　無料
募集期間　平成２０年1月５日まで。
但し、予定人数４０名程度になり次第、受付を終了します。
講　師　ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会　加藤　幸一



《この小冊子からの図版、文章等の無断転載を禁じます》

知っておきたい仏像の見方

加藤幸一

私たちがよく言う『仏様』とは三つの意味がある。一つは仏教を開いたお釈迦様（釈迦牟尼仏）、二つ目はお寺に祀られているさまざまな仏様、三つ目は死者のことである。

また『仏像』とは、仏様の像という意味で、釈迦の像など、お寺に祀られているさまざまな仏様の像（彫像や画像）のことである。

ヨーロッパなど世界各国に広まっているキリスト教では、偶像崇拝を極端に嫌っている。西アジアや南アジア・東南アジアに広がるイスラム教もキリスト教と同様に偶像崇拝を嫌っている。しかし、わが国では偶像である仏像は生活の中に溶け込んでいる。

第1部　仏像の種類

仏像は、大きく分けると次の四つに分類される。

一・如来像

一番偉い仏様で、優しい顔をしていて、頭には肉髻や螺髪が見られ、身には衲衣と裳のみをまとっている。

二・菩薩像

二番目に偉い仏様で、優しい顔をしていて、頭には冠をかぶり、身にはさまざまな飾り物をしている。

三・明王像

三番目に偉い仏様で、怖い顔をしている。

四・天部像

如来にも菩薩にも明王にも属さない仏様で、仏法を守る。

如来は悟りに達成した成道者であり、菩薩は悟りを求めて修行中の修行者であり、明王は如来の化身であり、天部は仏法の守護者であるといえる。

以上の如来・菩薩・明王・天（天部）の他に、羅漢・祖師・高僧の像や神像なども広い意味では仏像に入れることがある。

1・如来について

一番偉い仏様。上半身は衲衣を着て、下半身は裳をはいているだけのお姿である。飾り物は一切身につけていない。頭には肉髻と螺髪が見られ、顔付きは柔和である。

如来とは、宇宙の真理を悟り、最高の境地に達した仏様のことである。性を超越し、男性でも女性でもない。

如来は、仏教が古代インドで生まれたこともあって、高温のため寒暑をしのぐに足るだけの衲衣と裳をまとっているだけである。冠・瓔珞・釧・天衣などの装身具は一切身に付けていない。ただし、大日如来は、菩薩の姿をして装身具を身につけ例外である。

三十二相

仏様の背丈は、一丈六尺（「丈六」、約五メートル）と伝えられている。座った時の座高は「半丈六」である。そして、三十二のすぐれた姿・顔かたちを備えているという。これを三十二相という。主なものをあげると次の通りである。

〈肉髻相〉頭上は髻（髪の毛を集めて束ねた髻）のような、つまりお椀を伏せたような肉の盛り上がりが見られるという。

〈白毫相〉眉と眉との間にある右に旋回した渦巻き状をした白い毛がみられるという。

〈眼色如紺青相〉目の玉が青色をしているという。

〈四十歯相〉大人の歯は三十二本（『四八（歯は）、三十二』と語呂合わせして覚えるとよい）あるのが普通であるが、四十本もの歯があるという。

〈四牙白浄相〉上下四本の歯は牙のように白いという。

〈広長舌相〉舌は広くて長く、口から出して広げると顔をおおい、頭の髪の生え際まで届くという。

〈梵声相〉仏様は、大きな声でしかも美声なので、聞く人に深い感銘を与えるという。ほら貝の音は仏様の声をあらわしているといわれている。

〈獅子頬相〉獅子の頬のように両頬が豊かに膨らんでいるという。

〈肩円満相〉肩が豊かに盛り上がって丸みを帯びているという。

〈手足縵網相〉多くの人々を漏れなく救い上げられるようにと、手足の指の間に水掻きのような膜が見られるという。

〈正立手摩膝相〉直立して腕を下に伸ばしたとき、救いの手をさしのべやすいようにと手が膝をなでるくらいの所まで届くという。

〈円身相（身広長等相）〉両手を広げた長さと身長とが同じ長さであるという。

〈馬陰蔵相〉男根が馬のように体内に隠されているという。これは仏様が男でも女でもなく、男女の性を超越していることを示している。馬陰蔵相ともいう。

〈金色相〉全身が金色に輝いているという。

〈丈光相（常光一丈相）〉身体の周辺に一丈（約三メートル）の長さの光を放っているという。

〈毛孔生青色相〉一つ一つ毛穴から青色の毛が生えているという。

〈毛上向相〉身体にあるすべての毛が右回りに螺旋を描き、上の方に向いているという。

〈足下安平立相〉歩くときに足の裏で平等に地面を踏めるようにと、足の裏はくぼんだところのない偏平足をして、踏まない部分がないようにしているという。

〈千輻輪相（足下二輪相）〉足裏の中央には、千本の輻（スポーク）

を持つ車輪のような千輻輪の文様が見られるという。
また、千輻輪の輪の他に輪宝の形をした太陽の文様の輪も見られることから『足下二輪相』とも言う。
その他の三十二相は次の通りである。
足跟満足相（かかとが広くて平らである）、足趺高満相（足の甲が盛り上がっている）、手足柔軟相（手足が柔らかい）、長指相（手足の指が長い）、伊泥延相（伊泥延〔一種の鹿〕のように股・膝・ふくらはぎがしなやかに伸びている）、細薄皮相（皮膚がきめ細かく美しい）、両腋満相（腋の下が盛り上がる）、身広端正相（体全体が大きくて端正である）、七処隆満相（首・肩・腰・両手・両足が豊かに盛り上がっている）、上身如獅子相（上半身がライオンのように威厳がある）、齖白斉密相（歯がすきまなく並ぶ）、味中得上味相（何を食べても最高の味に変える）、牛眼睫相（まつげが牛のように長くて美しい）
以上のように仏様の三十二の肉体的な特徴を三十二相というが、さらに八十の小さな特質をも備えているという。これを八十種好といい、三十二相とあわせて『三十二相八十種好』と呼ばれる。
「相好を崩す」の『相好』はここからきている。

如来像の図の説明

肉髻――仏様の頭上にあり、髻（髪の毛を集めて束ねた髷）のように頭の頂上の骨が盛り上がったもの。お椀を伏せたような形になっている。仏様は我々人間よりもふくれ上がった分だけ知恵が余分にあるといわれている。
肉髻珠――肉髻の前面にある赤い玉。肉髻の部分は髪の毛が生え

阿弥陀如来

ておらず、地肌が見えて赤くなっているのが本来だという。しかし実際の仏像は肉髻の部分まで螺髪と呼ばれる髪の毛でおおわれている。そのため赤い肉髻の名残として肉髻の前面に肉髻珠を表すのである。

螺髪――右に旋回してぐるぐると螺旋状をした小さな渦巻状の巻き毛がたくさん集まった形の頭髪。「螺」は、法螺貝（巻き貝）の「螺」である。仏様の体毛はすべて右に旋回しているとされる。毛髪がこのように縮れているのは、インド人の特徴を表しているからであるという。

白毫――仏様の眉間にある渦巻状の白い毛。すみずみまで見通せる光を放っているという。仏像では、水晶をはめ込んで白毫を表し、仏画では、白毫から出た光を線で表すことがある。

光背――仏様から発している光をあらわしていて、仏像の背後に付けるものである。光背には、頭光や身光があげられる。

頭光――頭の後ろにある円形のもの。仏様の頭から発している光である。

身光――身体の後ろにある楕円形のもの。仏様の胴体から発している光である。

結跏趺座――珈（足の裏）と趺（足の表）とを結んで座するという意味で、あぐらをかき、両方の足の裏を上に向け、右脚を左ももに左脚を右ももにのせて組む。座禅の時の座り方と同じである。

なお、結跏趺座には吉祥座と降魔座の二種類がある。吉祥座は右脚上、つまり右脚を左脚の上にのせた形で、右脚が前面に見られる。降魔座はその逆で、左脚上になっていて、左脚が前面に見られる。吉祥座は阿弥陀如来に、降魔座は悪魔を降伏し、悟りを開いたという釈迦如来に多く見られる。筆者は、『右（ぎ）（き）吉祥座、阿弥陀如来』とゴロ合わせして覚えている。

衲衣――肩から羽織った大きな布。衲衣の着方で、衲衣を左肩はおおっているが右肩はおおわない、つまり右肩をあらわにする着方の『偏袒右肩』（『袒』とは「はだぬぐ」という意味）と、両方の肩をおおい通した『通肩』の二種類がある。前者の偏袒右肩は右肩をあらわにして相手に敬意を表す正式な着方で、後者の通肩は略式で、本来は外出の時の着方である。

偏袒右肩　吉祥座
（印相は阿弥陀定印）

通　肩　　降魔座
（印相は禅定印）

偏袒右肩は一枚の布を身体に巻つけて着こなす方法である。中には背中からあらわになった右肩にまで布の一部がかかっている場合もあり、一見して通肩に見えるがこれも偏袒右肩である。むしろ右肩にまで布の一部がかかっている方が多く見られる。

一方、通肩は二枚の布を使って身体に巻き付けて着こなす方法である。

裳――――下半身に付ける巻きスカートのようなもの。

印相――――悟りや誓い願った誓願などの宗教的理念を表すために、手の指で作るさまざまな形。これによって仏像の種類をある程度まで見分けることができる。

2．菩薩について

如来の次ぎに偉い仏様。髪は結い上げた頭髪で、その上に冠をかぶる。身には条帛を付け、その上に天衣を飾り、全身にはさまざまな飾り物を付けている。顔付きは柔和である。

菩薩は、上に向かっては如来の境地を目ざして悟りの道を求めて修行中である。これを『上求菩提』という。菩提とは悟りという意味である。他方で菩薩は、下に向かってはすべての人々を教化し救おうとしている。これを『下化衆生』という。衆生とは、この世に生きているすべての生き物という意味である。狭い意味では人々をさす。

つまり菩薩は、『上求菩提・下化衆生』の両方を兼ね備えた如来の一番弟子格の尊者といえる。

如来が出家（家を出ること）後に家を出て修行の道に入っている姿をしているのに対し、菩薩はまだ悟りを開いていない出家前の貴族の姿をしている。そのため装身具などを身につけ華やかである。ただし例外がある。地蔵菩薩は僧侶の姿を、馬頭観音菩薩は明王の姿をしている。

つまり菩薩は、裸の上半身には条帛を左肩から右の腋へとまとい、さらにその上に細長くて薄物の布である天衣を両肩から垂らしてふわりとまとっている。下半身は巻きスカートのような裳（菩薩・明王の場合は正しくは『裙』という）を身につけている。そして頭上には宝冠、胸には首飾りのような瓔珞、腕首には腕釧のような腕釧、肘の上方には臂釧、足首には足釧というように、装身具をつけて身を飾っているのである。頭上には宝冠をかぶらずに髻と呼ばれる髷のままとなっている場合もある。また髻には束ねた髪の残りを垂らす垂髪がよく見うけられる。

なお菩薩も、如来と同様に性を超越し、男性でも女性でもない。

菩薩像の図の説明

宝冠――――菩薩や大日如来がかぶる冠。
条帛――――裸の上半身に、たすきのように菩薩の左肩から胸を通って腰へと架け渡される布。
天衣――――薄物の細長い布で、両肩から長く垂らして身体の脇や裾のあたりをふわりとまとっている。
瓔珞――――金・銀・宝石・玉などを紐などでつなぎ連ねた飾り物。仏様の首飾りあるいは胸飾りとして利用される。また天蓋から垂れ下げる飾りにも利用される。
釧――――輪の形をした装身具で、腕釧・臂釧・足釧の三種類がある。
髻――――菩薩・明王・天部が結い上げた髪。宝髻ともいう。

観音菩薩像

3・明王について

菩薩の次に偉い仏様。大日如来の使者あるいは化身で、大変恐ろしい顔付きと姿をしている。冠や天衣は身につけていない。

明王は、大日如来の使者あるいは化身（仏様の変身）で、すさまじい忿怒の形相となっている。ただし孔雀明王は例外で、菩薩の姿をしている。

明王は、悪魔を押さえ鎮めたり、救いがたい人々を導くため、明王の背後には火炎が燃え盛り、武器などをもって大変恐ろしい姿となっている。これは慈悲の力で人々を救おうとする柔和な表情の菩薩とは対照的で、菩薩の慈悲だけでは救えない愚かな人々を忿怒の姿で救おうとしている。

服装は基本的には菩薩と同じであるとされるが、大きな違いは天衣や宝冠ははずしていることである。

不動明王像

なお明王の『明』とは、明呪すなわち真言陀羅尼と言う呪文のことである。密教の教えでは、真言陀羅尼を一心に唱えると、その力は絶大であり、さまざまな願い事がかなえられるという。つまり明王は、呪文を唱えて祈るなら、さまざまな願い事をかなえさせてくれる王という意味の密教の仏様である。

4・天部について

天部は如来・菩薩・明王のどれにも属さない、位が一番低い仏様。仏法を守っている。

天（天部）は仏教が広まる以前の古代インドの民間信仰の神々やバラモン教（のちのヒンドゥー教［インド教］）の神々などが仏教に取り入れられたもので、天上界に住み仏法を守る神である。天部は、姿や顔付きがこれといって定めがなく、男あり女あり、さらには鳥獣を人格化したものまである。

5・その他の仏像

以上の如来や菩薩、明王、天部にも属さない仏像の例として、祖師像としての弘法大師（空海）像と民間信仰に見られる青面金剛の石仏（庚申塔）を下段に紹介した。

［天部像］

梵天

帝釈天

弁才天

歓喜天

［その他の仏像］

弘法大師

青面金剛

第2部　さまざまな如来像

如来にはさまざまな種類がある。菩薩形をしている大日如来を除いたすべて如来は、どれも同じ如来形をしているため、如来の種類を判別するには印相を手掛かりにするほかはないのである。

如来の印相

a・施無畏・与願印

右手が施無畏印、左手が与願印である。施無畏とは「無畏を施す」つまり不安の除去を意味し、施無畏印は五指を伸ばし、その指先を上に向けて胸前に置く印相である。与願は「願いを与える」つまり願いをかなえることを意味し、与願印は、五指を伸ばして、座像の時は手のひらを上に向けて膝のあたりに置き、立像の時は手のひらを下に垂らす印相である。

なお、飛鳥時代の与願印は小指と薬指を上方に曲げている。

施無畏・与願印を結んでいる
如来像

《通仏相》

施無畏・与願印を結んだ印相は、どの如来にもみられる如来共通の印相である。このように如来共通の印相を「通仏相」という。奈良時代以前の如来像は、釈迦如来でも薬師如来でも阿弥陀如来でも施無畏・与願印を結ぶ通仏相をしているため、外見だけでは区別はつきにくい。その如来像の造立の縁起などがあれば何の如来像かがわかるのみなのである。

《通仏相の如来の区別の仕方》

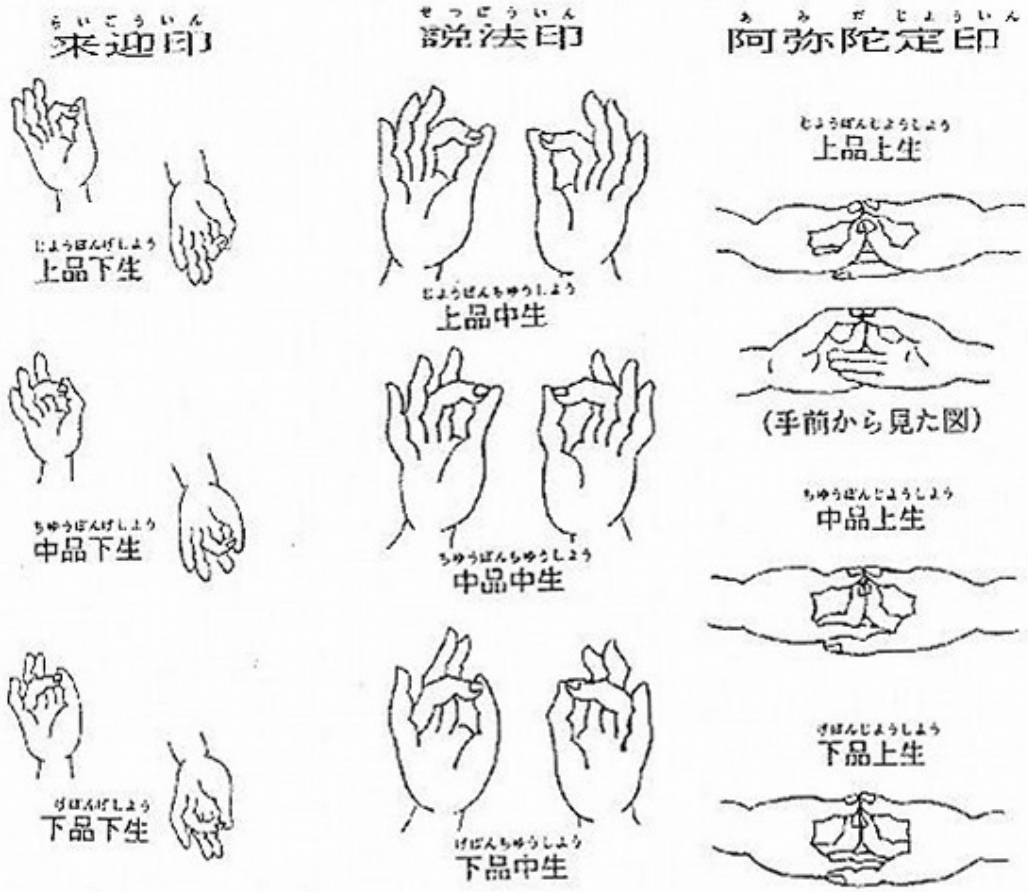
通仏相での如来像の区別は、施無畏印についてみるとよい。釈迦は中指を少し前に出し、薬師は薬指を少し前に出していることがあるので、それによって両者を区別できることがある。

また、結跏趺座をしている如来像では、それが吉祥座なら阿弥陀、降魔座なら釈迦であると思われる。

b・阿弥陀九品印

右手、左手ともに、親指と他の一本の指で輪を作っている印相で、九種類ある。つまり阿弥陀如来は、往生者の信仰の深さ・機根の高さ（悟りを開くべき素質や能力の高さ）や善行の多さの違いによって次のような九つの救い方のランクがある。

阿弥陀定印（禅定印の一種、略して弥陀定印ともいう）が三つの等級、阿弥陀説法印（転法輪印の一種）も三つの等級、阿



弥陀来迎印（施無畏・与願印の一種）も三つの等級、計九つの等級で、これを阿弥陀九品印という。

このうちよく見られるのは上品上生の「阿弥陀定印」、上品下生の「来迎印」の二つである。『品』とは信仰の深さの等級を、『生』は善行の多さの等級をあらわすという。

なお、阿弥陀来迎印の珍しい例として左右両手の位置関係が全く逆である『逆手来迎印』の仏像がある。これは中国の宋時代の阿弥陀仏の絵像の印相が左右逆となっていたことの影響を受けたものである。

c. 禅定印（法界定印）

禅定印は座禅を組んで深い瞑想に入っていることを示す印相で、釈迦如来が結ぶ。禅定とは、心を落ち着けて精神を統一することである。釈迦如来がブダガヤの菩提樹の下で瞑想にはいり、悟りを開いたときに結んだ印と言われる。菩提樹の「菩提」とは「悟り」という意味である。大日如来が結べば法界定印と呼ぶ。腕釧があるので大日如来の印とわかる。理（悟り）の境地を示す胎蔵界大日如来の印である。禅定印を結んだ釈迦如来像は禅宗系の寺院の本尊に、法界定印を結んだ胎蔵界大日如来像は密教系寺院の本尊によく見られる。

d. 薬壺印（法界定印の一種）

薬師如来が薬壺を持って法界定印を結べば、薬壺印となる。

e. 智拳印

金剛界大日如来の結ぶ印で、智（思考）を表す。左手は金剛拳（拳の中に親指を入れた形の印）を結び、その左の手の金剛拳から出した人差し指を右の手でつかむ。右手はこのとき、親指と人差し指の先を付けて、さらにそれを左手の人差し指の先にも付けることによって、以上の三指の先が一点で付けている状態となる。

なお、忍者が結ぶ印が大日如来の智拳印なのは、密教を取り入れた山岳仏教の修験道の影響を受けたからと考えられている。

1. 釈迦如来（お釈迦様）

釈迦はインドで仏教を開いた実在の人物である。釈迦如来が結ぶ施無畏・与願印は説法印の一種であり、施無畏・与願印を結んだ立像の釈迦如来は各地に説法をしている様子をあらわしているという。

〔像容〕ア. 如来形をしていて、施無畏・与願印をとる。右手の施無畏印では中指を少し前に出していることが多い。立像と座像の両方がある。

イ. 如来形をしていて、印相は禅定印をとる。必ず座像である。釈迦が菩提樹の下で瞑想にふけっている姿である。

施無畏・与願印を結ぶ
釈迦如来

禅定印を結ぶ釈迦如来

〔三尊像〕釈迦三尊の脇侍は、文殊菩薩（向かって右）と普賢菩薩（向かって左）である。

《釈迦五印》

釈迦五印とは、施無畏印・与願印・禅定印・降魔印・転法輪印の五つである。このうち、施無畏印・与願印及び転法輪印は釈迦如来のみが結ぶ印相ではなく、他の如来でも結ぶ如来共通の印相、つまり通仏相の印相である。

上記の転法輪印は、鎌倉市にある極楽寺の釈迦如来座像の転法輪印である。

ブダガヤの菩提樹のもとで独座して禅定印を結び、瞑想を続けていた釈迦が最後に悟りを得るが、降魔印は、悪魔の誘惑や妨害に打ち勝って悟りを得たことに対する証人として大地の神々を呼ぶために五指を伸ばして大地に触れた時の印相である。この時に悪魔は退散し、大地の神々が現れるのである。悪魔を降伏するという意味で降魔印というが、地に付けるので触地印ともいう。他に阿閦如来も触地印を結んでいる。

転法輪印は、釈迦が鹿野苑で初めて五人の比丘のために説教した時（この初めての説法を「初転法輪」という）に結んだ印である。ガンダーラの仏像以来見られる印相である。

「転法輪」とは、法輪（車輪のような形をして八方に矛先が出ていて、相手に向けて投げる武器、輪宝）を転がすという意味で、敵を倒し説法して正しい教えが広まっていくことを示しているという。この印相は左右の手を胸の前に上げ、法輪を転がそうとする様子を表しているという。説法印の一種である。

《釈迦の十大弟子》

釈迦の多くの弟子の中で、特に優れた十人の弟子のことで、各分野ごとの第一人者たちである。十大弟子は次の通りである。

◎舎利仏（知恵第一）

◎目連（神通力によって超人的な力をもったので、神通第一）
　盂蘭盆会（お盆）の行事は、餓鬼道に落ちて逆さまにつるされ苦しんでいる母親を、子の目連が救った話より成立したとの俗説がある。お盆に先祖代々や父母を供養するのはこのためである。

◎羅睺羅（戒律による修行を積んだので、密行第一）

◎富楼那（話術にすぐれていたので、説法第一）

◎須菩提（「空」の意味をよく理解したので、解空第一）

◎阿難（聞いた教えはすべて覚えたので、多聞第一）
　釈迦のいとこ。釈迦入滅迄、常にそばにいて仕え、釈迦の教えを聞く機会に最も恵まれた。

あるとき阿難が修行していると、一匹の餓鬼があらわれて、
「あなたの顔には、死相が出ている。」
と言われる。阿難は、
「この死相から逃れる方法は。」
と尋ねる。そこで餓鬼は、
「我々餓鬼に食物を与え、有り難い教えを説いてくれ。」
と答える。早速実行する。
これが施餓鬼会の起こりである。

◎阿那律（遠近・昼夜、見通す眼をもつので、天眼第一）
◎優婆離（戒律を堅く守ったので、持戒第一）
◎迦葉（さまざまな苦行に耐えるので、頭陀第一）
釈迦が一枝の蓮華をひねったのを見て、迦葉一人がその意味を理解してほほえんだという「拈華微笑」の釈迦如来（下図）の逸話がある。

◎迦旃延（弁舌がさわやかであるので、論議第一）

筆者は、『しゃ（舎）も（目）ら（羅）ふ（富）す（須）、あな（阿難）あな（阿那）う（優）かしょう（迦葉）か（迦）』と語呂合せで覚えている。

《十六羅漢像》

他に釈迦の弟子としては、十六羅漢、さらに五百羅漢もある。十六羅漢は、釈迦三尊・十六羅漢像（画像）によく見られる。

五百羅漢は、川越の喜多院、目黒の大円寺の石像や目黒の五百羅漢寺（江戸時代は江戸の本所にあった）の木像などが知られる。

羅漢は、阿羅漢の略で、上座部仏教（小乗仏教）では、最高の悟りに達した尊者。しかしここでは、釈迦の弟子としてとらえられることが多い。

《賓頭盧》

羅漢の一人、賓頭盧尊者は十六羅漢には属していないが、一説には、十六羅漢の第一尊者の賓度羅跋羅墮闍尊者とされる。

賓頭盧尊者は、末法の人々に斎会（僧尼を集めて、斎食（食事）を施す法会）を設けて食事などを供養したといわれる。そのため食堂にまつられるのが本来である。

しかし、賓頭盧には病のある人がこの像の自分と同じ病のある身体の部分を撫でて、さらに自分の病の部分を撫でると治るという俗信があり、寺院の本堂の外側などにに安置されていて人々によって単独で信仰され、「撫で仏」とも呼ばれている。

昔はこの像を媒体に眼病などが移る心配あるというので、保健衛生上問題があるとして像の回りに金網をはって触れられないようにした寺院もあったという。

《八部衆（天竜八部衆）》

一方、釈迦の眷属（家来のこと）としては、釈迦に教化され、

釈迦の眷属となった、もと異教の神々である阿修羅などの八部衆（天竜八部衆）も上げられる。八部衆とは次の通りである。

◎「天」は、神。

◎「竜」は、竜神。

◎「夜叉」は、鬼神。

◎「乾闥婆」は、伎楽（古代インド・チベットの仮面音楽劇）の神。

◎「阿修羅」は、戦闘の神。

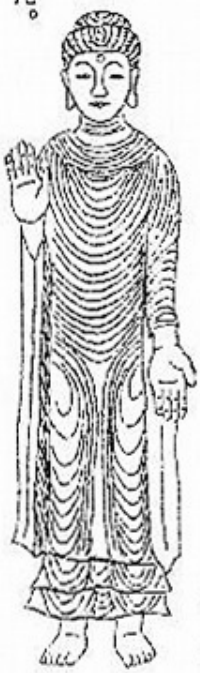
◎「迦楼羅」は、口から炎を吐く鳥頭人身の鳥。

◎「緊那羅」は、人に似るが神・人・畜生のいずれともいえない人非人の姿をした歌舞の神。

◎「摩睺羅迦」は蛇の神。

《清涼寺式釈迦如来像》

釈迦が尼連禅河という川で身を清めた時の、その川の水に衲衣がぬれた姿であると言われている。京都の嵯峨にある清涼寺（通称は「嵯峨釈迦堂」）の釈迦如来像が代表的である。奝然が宋の国で作らせて、九八五年に持ち帰ったもの。その後、各地で模倣されて、この様式が広がった。



通肩の釈迦の衲衣の衣紋の線が襟から腹へかけて両端が上向きの半円の連続とし、胸の下の脚の付け根はY字形のようになり、両方の脚ともに両端が上向きの縦長の半円を連続させている。頭髪は、螺髪ではなく、組み紐か縄のようなものを束ねて巻いているようになっている。印相は施無畏・与願印である。

2・阿弥陀如来（阿弥陀様）

極楽浄土に住むという阿弥陀如来は、西方の十万億土のかなたにある極楽浄土を開いた仏様である。　人々がこの仏様を信じて『南無阿弥陀仏』の念仏を唱えるだけで、この仏様の導きによって死後に極楽浄土に生まれ変われるという。

阿弥陀とは『無量』と言う意味で、「光」や「寿命」が無量であることから「無量光如来」とか「無量寿如来」とも呼ばれる。

阿弥陀如来について説かれている経典が『阿弥陀経』『無量寿経』『観無量寿経』の浄土三部経である。

日本以外のインドや中国など、大陸が広がる地域では、日の出よりも日没の美しさが注目されたためか、日没する広野のはるかかなたにすばらしい世界である極楽浄土が広がっていると信じられたのであろう。

［像　容］如来形をしていて、印相は阿弥陀九品印をとる。

阿弥陀定印は釈迦如来の禅定印と同じく瞑想している姿を表している。必ず座像である。説法印は、人々に説法をしている姿を表している。来迎印は亡くなられた人を迎えに行く姿を表している。

阿弥陀如来の座像は吉祥座をとっている。

定印の阿弥陀如来

来迎印の阿弥陀如来

説法印の阿弥陀如来

［三尊像］阿弥陀三尊の脇侍は、観音菩薩（向かって右）と勢至菩薩（向かって左）である。

《阿弥陀二尊の来迎図》

阿弥陀来迎印を結んだ阿弥陀如来が、観音・勢至の両菩薩をともなって、往生した人を迎えに、雲に乗って降りて来る場面を描いた仏画が『阿弥陀三尊来迎図』である。観音菩薩は人々を極楽浄土へ導くために乗せる蓮台を両手で持ち、勢至菩薩は合掌している。両菩薩とも軽く膝を曲げる。中には「早来迎」と言って、早い雲に乗って降りて来る場合は、膝を深く曲げ、腰を一段と落とす来迎図もみられる。

その他に、二十五人の菩薩を従えた「阿弥陀二十五菩薩来迎図」や、さらにもっと多くの聖衆（極楽浄土に住む菩薩たち）を従えた「阿弥陀聖衆来迎図」も見られる。

《五劫思惟の阿弥陀如来》

阿弥陀如来はもとインドに住む王子であったが、世自在王如来のもとで出家して法蔵比丘といった。世自在如来は法蔵比丘に二百十億というさまざまな仏の国土（仏国土）を見させた。

そこで法蔵比丘は五劫という長い年月をかけて独座し、将来自分が悟りを得た後に生まれるべき仏の国土に関して思惟し、瞑想した。これを『五劫思惟』と言う。五劫の間を独座思惟したので五劫思惟の阿弥陀如来像が伸び放題となった頭髪の姿をしているのはそのためである。また、両手は合掌している。

劫とは長さの単位で、人類の誕生から破滅までの長さが四劫で、五劫はさらにこれを超えた期間である。

《阿弥陀の四十八誓願》

五劫の期間を独座思惟し、最後にいくつもある仏の国土の中から一つだけを選択した。それが西方十万億土のかなたにある極楽浄土である。次に法蔵比丘は、極楽浄土に生まれ変わるために四十八の誓願をたてて修行した。そして、ついに悟りを得て極楽浄土に生まれ変わり仏陀（如来）となった。これが阿弥陀如来である。

阿弥陀如来の頭光に四十八本の光のすじが放射状に描かれていることがあるが、これは四十八誓願からきている。また、阿弥陀くじの名称はこの阿弥陀如来の後光（頭光）からきている。

《六阿弥陀参り》

阿弥陀如来を安置している六ケ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。特に江戸の町で流行し、数字の『六』にちなんで、明け六ツ時（午前六時頃）に出発して、暮れ六ツ時（午後六時頃）に帰ることが流行した。

六阿弥陀の『六』のいわれは、阿弥陀如来を唱えるときの『南無阿弥陀仏』（六字名号）の六文字よりきている。

《善光寺式阿弥陀三尊像》

一つの舟型の光背の中に立像の阿弥陀三尊像が並ぶ一光三尊の形式をとっている。中尊の阿弥陀如来の印相は、阿弥陀九品印をとらず、右手は施無畏印で、左手は下にして、グーチョキパーのチョキを出したような人差し指と中指だけを伸ばしている（刀印）。観音・勢至の両脇侍は胸の前で両手の手の平を水平に重ねて、或いは宝珠を包むようにして水平に重ねている（持宝珠印）。

・薬師如来（お薬師様）

万のかなたの瑠璃色（青色）に光り輝く浄瑠璃光の世界、「浄浄土」に住んでいる仏様である。

の仏様は人々を救うために十二の願いごと『薬師十二大願』をたが、そのうちの第七の大願である「人々のもろもろの病気を除き、心身を安楽にする」という願いに基づいて医師を意味する『薬師』の名がついた。この名の示すように、人々の病苦を救ったり、病気で死にかけている者には寿命を延ばしたりするなど医薬をつかさどる現世利益的性格の強い仏として信仰されてきた。特に目の病には大変御利益があるとの信仰があり、「向い目」の絵馬の奉納がよく見られた。

〔像　容〕ア・如来形をして、印相は右手が施無畏印、左手は与願印をして手のひらの上に薬壺（宝珠となっていることもある）を持つ。立像・座像の両方が見られる。

薬師如来像の施無畏印は薬指を少し前に出していることが多い。

イ・如来形をして、印相は薬壺印（薬壺を持った法界定印）で、必ず座像である。

〔三尊像〕薬師三尊の脇侍は、日光菩薩（向かって右）・月光菩薩（向かって左）である。

《薬師如来と天台宗の開祖最澄》

薬師如来の仏像は、天台宗系の寺院や薬師堂・瑠璃殿などに多く見られる。また、比叡山延暦寺の本尊も薬師如来像である。その理由は、最澄が比叡山に登って修行し、そこで木を切って薬師如来像一体を刻み、天台宗を開いたと言われるためである。

《薬師十二神将》

十二大願にちなんで、薬師如来の眷族（血筋のつながった一族）に十二神将がある。それぞれの身には甲冑をつけ、手には武器を持って唐代の武人の姿をし、それぞれの頭上には十二支の動物が配されている。本来は十二支とは全く無関係であった。後世に十二大願と十二支とが結びついたものであるという。

薬師如来の脇侍である日光・月光両菩薩は、それぞれが昼と夜とに主尊の薬師如来を守っているといわれ、さらに薬師如来の徳をすべての方角に及ぼすために十二の方角に配置されたのがこの十二神将であるといわれる。

また、薬師十二神将は、一日を子の刻から亥の刻までの十二時に分けたそれぞれの時（一時は約二時間）に、代わる代わるに主尊の薬師如来を守っているともいわれている。

十二神将とは宮毘羅大将をはじめ、次の十二人の大将である。十二神将の十二支は次の例が一般的である。それぞれの持物は一定していない。

宮毘羅大将（子：子の刻、零時頃　子の方角、北）

わが国では金毘羅と呼ぶ。

伐折羅大将（丑：丑の刻、二時頃　丑の方角、ほぼ北々東）
迷企羅大将（寅：寅の刻、四時頃　寅の方角、ほぼ東北東）
安底羅大将（卯：卯の刻、六時頃　卯の方角、東）
頞儞羅大将（辰：辰の刻、八時頃　辰の方角、ほぼ東南東）
珊底羅大将（巳：巳の刻、十時頃　巳の方角、ほぼ南々東）
因達羅大将（午：午の刻、十二時　午の方角、南）

古代インドの武勇神インドラ。わが国では帝釈天と呼ぶ。

波夷羅大将（未：未の刻、十四時　未の方角、ほぼ南々西）
摩虎羅大将（申：申の刻、十六時　申の方角、ほぼ西南西）
真達羅大将（酉：酉の刻、十八時　酉の方角、西）
招杜羅大将（戌：戌の刻、二十時　戌の方角、ほぼ西北西）
毘羯羅大将（亥：亥の刻、二十二時　亥の方角、ほぼ北々西）

以上の十二神将を筆者は、『くばめあん（宮・伐・迷・安）あにさん（頞儞・珊）、インドに（因）入って（波夷）、まこしん（摩虎・真）しょうび（招・毘）』と独自に語呂合わせして覚えている。

《七仏薬師》

薬師如来の光背には、薬師如来の分身とされる合計六個の化仏（中央の薬師如来とあわせると七つとなる）、あるいは七個が付けられている。これは、東方の浄瑠璃国土に薬師如来を中心に善名称吉祥如来など七仏が住んでいると説かれていることによる。

また、薬師如来像を安置している七ケ所の寺院を巡拝する七仏薬師にちなんだ信仰も見られた。

4・大日如来

大日如来は、真言密教（東密）の本尊で、「『日』の光は一辺を照らし、裏側を照らすことはできず、昼夜の別を作るが、この如来の光は一切平等に遍く照らし、陰を作らない『日』以上の光。」といい、『日』の神の威力を上回ることから『大』を付けて大日如来、あるいは遍く照らすことから遍照如来ともいう。この如来は、宇宙の実相（生滅変化する万物の奥にある真実の様子）を仏陀としたものという。つまり宇宙を仏格化した仏様である。それゆえ、密教では、すべての如来・菩薩・明王・天部（天）の上に位置し、すべての現象は大日如来の本質の現れとされている。人間もまた大日如来の本質であるから、修行によって大日如来と一体化することができるという「即身成仏」の考え方も生まれた。

像容は他の如来とは大きく違って菩薩形をとっている。つまり、髪を結い、冠をかぶり、身には装身具を飾り付けている。菩薩と像容は同じではあるが、菩薩以上に華やかさが見られ、釈迦・阿弥陀・薬師などのさまざまな如来よりもさらに上の位にあるとの威容を示し、すべての如来の中で最高の位を表している。宝冠には密教の五智如来の化仏が刻まれているとされ、これを五智宝冠（五仏宝冠）と呼んでいる。五智宝冠は大日如来の他に、弥勒菩薩・虚空蔵菩薩・五大虚空蔵菩薩などもかぶるものである。

大日如来は、理（悟り）の世界（宇宙）を表すという胎蔵界大日如来と智（思考）の世界を表すという金剛界大日如来の二種類に分かれ、それぞれの世界を支配している。胎蔵界の大日如来はさとりの境地を象徴する法界定印を結び、金剛界の大日如来は悪魔を打ち破る堅固な智恵を象徴する智拳印を結んでいる。

なお、大日如来を根本本尊とする真言密教（東密）は大日と釈迦は別の仏様としているが、天台密教（台密）では大日と釈迦とは一

応区別してはいるが、根本は同じ仏様であるととらえられている。

大日如来の仏像は、密教の根本本尊となり、真言宗系寺院や修験関係の寺院に多く見られる。

［像　容］ア．胎蔵界大日如来は、菩薩形をして、印相は法界定印を結び、座像である。

イ．金剛界大日如来は、菩薩形をして、印相は智拳印を結び、座像である。

5．その他の如来像

《密教の五仏『五智如来』》

密教とは、呪法（呪文を唱えて行う祈祷法）を通して仏の世界の真理をとらえ、その力を現世に発揮しようとする教えで、加持祈祷を重んじている。教えがとても深く、理解するのに大変難しい仏教である。真言宗が代表的であるが（これを東密という）、天台宗も密教を大いに取り入れている（これを台密という）。

この密教の教えの中に五智如来の仏様が説かれている。五智とは、大日如来がさとった五つの智恵という意味である。五智如来には、金剛界五仏と胎蔵界五仏の二種類がある。金剛界五仏とは、次のとおりである。

金剛界大日如来（菩薩形で、智拳印を結ぶ）

阿閦如来（左手は衣の一端を握り、又は拳で腹部へ置き、右手は五指を伸ばして指頭で地を指す阿閦触地印）

宝生如来（左手は衣の一端を握り、又は拳で腹部へ置き、右手は与願印。あるいは右手は指先を右外の方向にして体の横に出し、掌を前あるいは上に向ける）

阿弥陀如来（阿弥陀定印を結ぶ）

宝生如来

不空成就如来（左手は衣の一端を握り、右手は施無畏印。あるいは、釈迦如来と同体であるとして右手、左手でそれぞれ施無畏印、与願印をとる。）

一方、胎蔵界五仏はまれである。胎蔵界五仏は次のとおりである。

宝幢如来（右手は右横に出す与願印で左手は衣の一端をとる）

開敷華王如来（右手は前に出す与願印で左手は衣の一端をとる）

無量寿如来（阿弥陀如来の別称）

天鼓雷音如来（右手は触地印で左手は拳印をとって膝に置く）

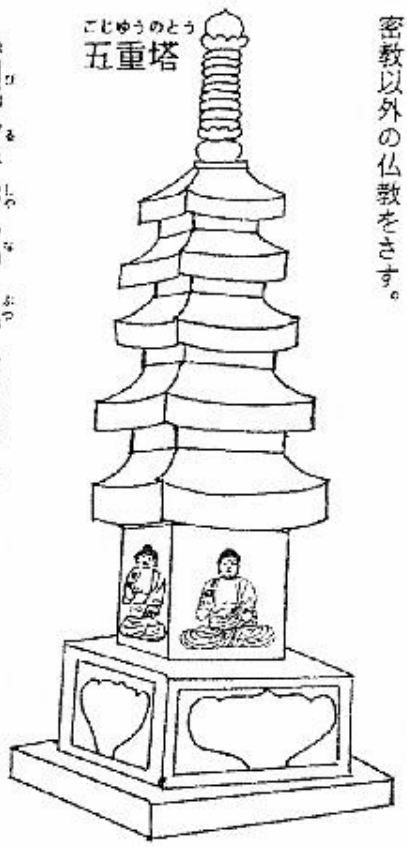
以上が密教の金剛界と胎蔵界の五仏（五智如来）である。大日如来のかぶる宝冠を「五智宝冠」と呼ぶのは宝冠に五智如来の化仏が刻まれているとされることからである。

なお、層塔や宝篋印塔などの石塔の四面に五智如来を刻む場合は、大日如来は塔身の中央と見立て、東側面が阿閦如来像、南側面が宝生如来像、西側面が阿弥陀如来像、北側面が不空成就如来像と時計回りに配置される。この時計回りの回り方は仏教発祥の古代インドの影響を受けているからである。

《顕教の四方仏『塔四方仏』》

顕教の『四方仏』は、薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒菩薩（あるいは弥勒如来）の四つの仏をさし、層塔の塔身軸部の四面に刻まれていることがよく見られるため『塔四方仏』とも呼ばれる。その配置は東に薬師（東方の浄瑠璃の浄土に住む）、南に釈迦、西に阿弥陀（西方の極楽浄土に住む）、さらに北に弥勒となっている。

顕教とは、釈迦の教えを経典によって学ぶ教えで、教えがやさしくて、誰にでも理解しやすい仏教のことである。教えが大変難しい密教以外の仏教をさす。



五重塔

《毘盧舎那仏（盧舎那仏）と大日如来》

華厳宗の総本山である東大寺にある大仏が毘盧舎那仏で、「三千大千世界」の頂点にたつ仏様である。如来の姿をしている。

毘盧舎那仏像は施無畏・与願印をした釈迦如来像と同じであるが、

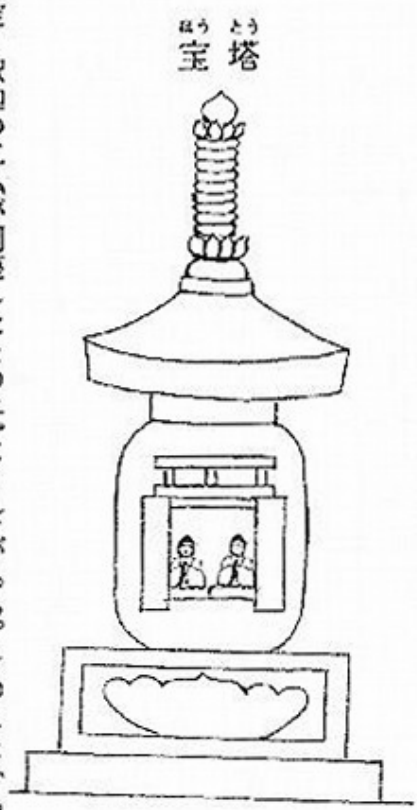
光背や台座蓮弁に多くの仏様がびっしりと見られる。これらのびっしりと刻まれた仏様はすべて釈迦如来像である。

地球上に現れた釈迦は小釈迦の一人で、それを千人程集めた世界を小千世界と呼び、そこに一人の中釈迦がいる。さらにその中釈迦を千人集めた世界を中千世界と呼び、そこに一人の大釈迦がいる。さらにその上、その大釈迦を千人集めた世界を大千世界と呼ぶ。これが全宇宙で、このように千が三重になっていることから「三千大千世界」と言うのである。

それに対して、「摩訶毘盧遮那仏」は、密教でいう菩薩の姿をした大日如来を指している。『摩訶』とは「優れていて偉大であること」を意味し、『毘盧遮那』とは「光り輝くもの」つまり「太陽」を意味している。如来の姿をした華厳宗の毘盧舎那仏（毘盧舎那如来）と菩薩の姿をした密教の摩訶毘盧遮那仏（毘盧遮那仏、大日如来）は、「舎」と「遮」の字の違いがあるが、宇宙を支配する仏様と言う意味で相通ずるものがある。

《多宝如来》

釈迦が法華経を説いたとき、地面の中から宝塔が出現した。その宝塔の中にいた多宝如来が釈迦が説法をした法華経をほめたたえ、塔中に釈迦を招いて、扉を開いて迎え入れ、自分の席の半分を譲り、



多宝・釈迦の二仏が同座したとのエピソードがある。そのことから宝塔の塔身軸部に多宝・釈迦の二仏併座の像が刻まれる。多宝如来のみ単独で刻まれることはない。向かって右側が多宝如来、左側が釈迦如来である。多宝・釈迦ともに合掌しているのが一般的である。

《題目塔》

多宝・釈迦は、法華経の題目と結び付いて、中央に題目の『南無妙法蓮華経』を、左右に『南無多宝如来』（向かって右側）『南無釈迦牟尼仏』（向かって左側）と文字が刻まれた題目塔が見られる。「南無」とは「ああ」という意味合いの感嘆の言葉で、「帰命」と訳す。

《弥勒如来》

弥勒菩薩は、仏滅後の五十六億七千万年後に須弥山の上空にある兜率天より下ってこの世に現れ、竜下樹のもとで悟りを開き、弥勒

如来となる。そしてこの世の人々を救う。

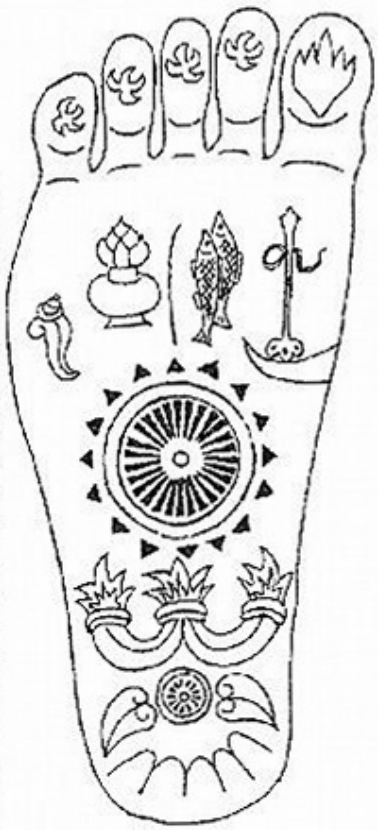
この弥勒如来は、如来形をしていて、通仏相の施無畏・与願印を結んでいる。

《仏足石》

古代インド仏教の初期では、釈迦の像を刻むことを畏敬し、仏像は作られなかった。そこで釈迦の姿の代わりに釈迦の象徴となる宝輪、菩提樹、天蓋などを礼拝したり、説法した時の釈迦の足の裏の足型を石に刻んで礼拝したり、また釈迦の遺骨を安置した舎利塔を礼拝したりした。

足の裏を描いた石を仏足石（ぶっそくせき）という。わが国最古のものは奈良の薬師寺に現存する天平勝宝五年（七五三、「しちごさん」と覚えるとよい）の仏足石である。仏足石は江戸時代中頃より各地で作られるようになる。

仏足石には釈迦の足の裏側に見られるという千輻輪相が刻まれている。すなわち、かかとの方から見ていくと、かかとには五つの山があり、その五つの山の上の両端には雲があり、その両側の雲の間から輪宝の形をした太陽がでていて、その太陽の更に上には、仏法僧の三つを表す三宝がある。これは梵天の冠であるとの説がある。そして中央部には千輻輪という千本の輻（スポーク）をもつという車輪のような輪宝がある。また、更にその上には親指の付け根には金剛杵と呼ばれる鉾（剣）があり、その隣には双魚と呼ばれる二匹の魚が並んで見られる。魚は、陸地の生物が一切滅んでも、海の中の魚だけが生き残ったというインドの神話から不滅を表すという。さらに隣りには宝瓶と呼ばれる瓶（華瓶）、そして小指の付け根ありには法螺貝が見られる。また、親指には月王と呼ばれる赤々と燃えている月、その他の指にはそれぞれに卍花文と呼ばれる卍の形をした花の模様が見られる。卍は古代インドの神話に出てくるヒンドゥー教の神、ヴィシュヌの胸に現れた吉祥の印という。



※右図は、主に京都洞雲寺の仏足石を参考にして描いた（筆者）。